

実習報告（学校変革基盤実習）

## 特別支援学校における教師のチーム支援の充実 —生活の質を考えた授業改善に着目して—

山口 美里（子ども支援探究コース特別支援教育系：現職教員）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

○探究実習のテーマ

病弱特別支援学校における児童生徒の生活の質の捉えと授業実践

○テーマ設定の理由

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』(令和3年1月26日 中央教育審議会)では、新時代の特別支援教育の在り方について、特別支援教育を担う教師の専門性向上が求められている。具体的には、全ての教師に対して、障害の特性等に関する理解や特別支援教育に関する基礎的な知識、個に応じた指導内容や指導方法の工夫などの特別支援教育に関する専門性が求められている。また、特別支援学校の教師に対しても、幅広い知識・技能の習得、専門的な知見を活用した指導などより高い専門性が求められている。

実習校であるA特別支援学校は、県内で唯一病弱、知的障害、肢体不自由の児童生徒がともに学ぶ3障害種併設の学校である。分校舎は、医療機関や施設等における訪問教育課程を編成している。障害の状況については、在籍児童生徒のほとんどが重度の肢体不自由と知的障害を併せ有し、体温調節や感染症等の健康上の問題を抱えており、日常的に医療的なケアが必要で長期的に入院をしている。また、C療育園の児童生徒のほとんどは学齢超過者であり、障害の程度も年齢もさまざまである。児童生徒の教育活動については、保護者や医療機関や施設等との連携や相互理解を図りながら、個々の病気や障害その他の能力や特性に応じて実施している。児童生徒の体調や訪問先の医療機関や施設等の状況を含め、さらに新型コロナウイルス感染症流行の影響もあり、授業形態の変更が加わり様々な制約もある中で授業を行っている。授業は通常教師と一対一で行っており、実際の授業場面を他の教師が目にもすることもない。児童生徒の実態把握や「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」「自立活動指導計画」の作成、授業立案、教材・教具の開発、学習評価について、授業をする教師一人が行っている。教師の中には、実態把握の難しさや授業内容や手だてに不安を抱きながら日々の授業をしているという現状が聞かれた。

そこで、本探究実習においては、特別支援学校における教師はより高い専門性が求められる中で、重度重複障害があり、日常的に医療的ケアが必要で行動範囲や活動の制約が大きい在籍児童生徒について、教師が豊かな生活をどのように捉え、自立活動の指導や支援を行っているかに注目し、探りたいと考え探究実習のテーマを設定した。

### 【探究実習の研究目標】

- (1) 教師への聞き取りや個別的教育支援計画により、児童生徒の今の生活の質や将来の豊かな生活について教師の捉えを知る。
- (2) 訪問教育の授業実践の現状について、自立活動の授業の実際より探る。

### 【探究実習の概要】

実習校名称	A 特別支援学校 分校舎
実習期間	2022年8月25日～2022年9月22日
実習内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ A 特別支援学校の学校概要 ・分校舎病弱教育について</li> <li>・ 重度心身障害児（者）について ・児童生徒理解、指導・支援の在り方</li> <li>・ 分校舎自立活動について</li> <li>・ 個別の教育支援計画，個別の指導計画，自立活動指導計画</li> <li>・ 分校舎研究について</li> <li>・ B 病院内訪問教育について</li> <li>・ B 病院内訪問教育参観</li> <li>・ C 療育園訪問教育について</li> <li>・ C 療育園におけるオンライン授業参観</li> <li>・ D 医療センター内訪問教育について</li> </ul>

### 【探究実習の成果と課題】

今回の探究実習では、A 特別支援学校分校舎における在籍児童生徒の生活の質や将来の豊かな生活をどのように捉えているかを知ることが目標の一つであった。児童生徒の生活の質についての教師の捉えに関しては、個別の教育支援計画を見ることに加え、直接教師に聞き取ることで、教師の思いを知ることができた。B 病院に入院する児童生徒のほとんどは、障害の程度が重く日常的に医療的なケアが必要で長期的に入院している。その特徴からも、「健康状態の維持・増進」「安心して病院施設での生活や学習に取り組む」「コミュニケーションの促進」が主に挙げられていることが分かった。豊かな生活を送るための生活の質という観点において、心身が安定している状態が整うことで、病棟職員との関わりや教師との関わりに向き合うことができるという考えが土台となっていることを学ぶことができた。

目標の二点目である自立活動については、心身が安定している状態を作ることと、安定した状態で保有感覚やコミュニケーションに関することに視点を置いた指導・支援を行うことで、豊かな生活の実現を目指していた。実際の授業場面では、触覚、視覚、聴覚、嗅覚、味覚など個に応じた保有感覚に訴えるような教材の提示や授業展開を工夫しつつ、児童生徒の全身状態や微細な変化に気を配り、関わりに対する児童生徒の受け止めや発信を教師が言語化してフィードバックしていた。これまでの自己のかかわり方を振り返り、感度の高い細やかな見取りの重要性を再確認することができた。

訪問教育において、病院施設等との連携は不可欠である。授業の意図や意義の理解や協力を丁寧に行うことで、学校と病院施設等が協力し合い、感染症予防等を行いながらも共に児童生徒の学びを支えていくことになるのではないかと感じた。また、一対一で授業を行うため、実態把握や目標設定、授業内容の精選など教師個人の高い専門性が求められる一方で、自己の力量に不安を感じている教師もいた。実習中にもビデオを使った事例検討などが行われており、複数の教師による客観的な評価や授業改善の助言をもらう場があることで、教師の学びの機会にもなっていると感じた。知識や技能を学び、それをもとに教師個人が実践を通して試行錯誤や省察を繰り返すことが特別支援教育の専門性を高めることにもつながっていくのではないかと考える。

### 【参考文献】

中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)